

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	支那説話研究資料[承前]：論説
Author(s)	高木，敏雄
Citation	龍南會雜誌， 8 8： 1 - 1 7
Issue date	1901-11-24
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/5235
Right	

龍南會雜誌第八十八號

論 說

支那說話研究資料

教授 高 木 敏 雄

其 三 〔前承〕

支那の洪水說話

洪水說話は、支那國民が古から傳へた、史的說話の中、最も有名なるものの一つである。堯の命によつて、治水の任に當つたものの、九年まで績を擧げ得なかつた、父の鯀に代つて、舜の世に及んで、遂に治水平土の大事業を成就した、禹が即ち此大洪水說話の英雄である。兎も角も、九年の大洪水を治めた、大事業家であれば、後世堯舜と並べて、聖人として尊崇さるるに、至つたのも、誠に尤の次第で、従つて、幾多の年月の間に、禹が眞正の史的人物であるか。或わ一個の說話的人物に過ぎないか、夫さゝ殆んど、分らぬ様になつた程、此英雄の身邊に、多くの說話的修飾が、凝集附着するに至つたのも、亦た甚だ了解し易い事である。併しながら、其父の鯀が何様である。堯から受けた大任を、全ねする事が出來ず、失敗の歴史を残して死んで了つた。唯、禹の父である、空前の大偉業を擧げた、禹の父であるところから、鯀に就ても、後世種種の說話が作爲され、大洪

水の説話に伴れて、禹の名と共に、鯀の名も不朽に傳わつてゐる。『述異記』と『拾遺記』とを、鯀に就て、次の説話を傳へてゐる。精細の差があるが、大體に於て同様である。

堯使鯀治水、不勝其任、遂誅鯀于羽山、化爲黃能、入于羽泉。黃能即黃熊也、陸居曰熊、水居曰能、

歸藏云、鯀死三歲不腐、剖之以吳刀、化爲黃龍、

堯命夏鯀治水、九載無績、鯀自沈於羽淵、化爲玄魚、時揚鬚振鱗、橫修波之上、見者謂爲河精、羽淵與河通源也、海民於羽山之中、修立鯀廟、四時以致祭祀、常見玄魚與蛟龍跳躍而出、觀者驚而畏矣、至舜命禹疏川、冀岳濟巨海、則龍鼉而爲梁、鼉翠岑、則神龍而爲馭、行徧日月之墟、惟不踐羽山之地、

此の説話を、國民特有の龍神信仰と、洪水説話の英雄の父とを、結合させてゐる。鯀の失敗を咎む可きである。其誅せられたの、恐らく當然である。併しながら、失敗したにせよ、誅戮せられたにもせよ、兎も角も禹の父である。國民の大恩人として、大事業の成功者として、永遠に記憶すべき豪傑の親である。此親を殺すと云ふのは、正史上の筆如何にもあれ、國民的感情に於て、忍びない事である。禹に對する、國民感謝の情に於て、到底忍び得らるゝ事ではない。また假令殺したにもせよ、殺したままで棄て置くの、少くとも、國民的感情或は國民感謝の情と、衝突するを免かれぬ。そこで或は、死んだ後三年までも、其屍骸が腐れなかつたとか、黃能になつたとか、黃龍に變じたとか、或はまた、鯀は殺されたのでわなない、實は自分で羽淵に沈んだのである。沈んだ後玄魚と化して河精と爲つてゐるとか、色色の説話が生じたのである。して見れば、海民が鯀の廟を

立てて、四時の祭をする云云のも、誠に道理至極の事である。玄魚と化したと云い、黃龍に化したと云い、黃能に化したと云い、鯀が飽まで水に關係あるのわ、水を治めると云事業に關係したから、起つた事であるか、但しわまた、鯀と云字其ものが、魚に従つておるから、生じた事であるか、此點に關してわ、材料に甚不幸な、吾吾現在の位置に於てわ、殘念ながら兎角の判斷を下すのわ、暫く控ねねばならぬ。

豪傑の出生に關する、奇怪の説話わ、支那說話の最も普通の特色の一つとして、今更、兎角の言を費すまでもない。吾吾の禹に關してわ、『吳越春秋』『拾遺記』『帝王世紀』『遁甲開山圖』などに、禹の誕生並に事業に就て、次の説話が見ゆる。

禹娶_レ於_二華氏女_一、名曰_二女嬉_一、年壯未_レ華、嬉_二於_二砥山_一、得_二薏苡_一而吞_レ之、意爲_二人所_レ感、因而妊孕、剖_レ脅而產_二高密_一、家_二西羌地_一、曰_二石紐_一、

父鯀妻_レ修、已見_二流星貫_一昴、夢接意感、又吞_二神珠薏苡_一、曾拆而生_二禹於_二石塢_一、虎鼻大口、兩耳參漏、首戴_二鈎鈴_一、曾有_二玉斗_一、足文履已、故名_二文命_一字高密、身長九尺、長_二於_二西羌_一。

古有_二大禹_一、女媧十九代孫、壽三百六十歲、入_二九嶷山_一、仙飛去、後三千六百歲、堯理_二天下_一洪水既甚、人民墊溺、大禹念_レ之、仍化_二生於_二石紐山_一、泉女狄暮汲_レ水、得_二石子_一如_レ珠愛而吞_レ之有_レ娠、十四月生_二子_一、及_レ長能知_二泉源_一、

禹鑿_二龍關之山_一亦謂_二之_二龍門_一、至_二一空巖_一、深數十里、幽暗不_レ可_二復進_一禹乃負_レ火而進、有_レ獸狀如_レ豕、銜_二夜明之珠_一、其光如_レ燭、又有_二青犬_一、行吠_二於_二前_一、禹計可_二十里_一、迷_二於_二晝夜_一、既覺漸明見_レ、向來豕犬變爲_二人形_一、皆著_二玄衣_一、又見_二一神_一、蛇身人面、禹因與_レ神語、神卽示_二禹八卦_一、

之圖、列_レ於金板之上、又有_二八神侍_レ側、禹曰、華胥生_二聖人_一是汝耶、答曰、華胥是九河神女以生_レ余也、乃探_二玉簡_一授_レ禹、長一尺二寸、以合_二十二時之數_一、使_レ量_二度天地_一、禹即執_二持此簡_一、以平_二定水土_一、蛇身之神、即義皇也、

第二の記事わ、治水者の禹をば、古の大禹の再生とし、最後の記事わ、龍門山の奥に於て、伏羲と禹との會見を傳_レてれる。蛇身の神わ、即義皇であると云のわ『帝王世紀』に『大昊庖犧氏風姓也、燧人之世有_二巨人跡_一。出_二于雷澤_一、華胥以_レ足履_二之有娠_一、生_二伏羲于成紀_一、蛇身人首、有成德』と見ゆる、即ち此である。國民的英雄をば、通常の人間同様に死なせないで、天界にもせよ、海の底にもせよ、但しわまた、深山の奥にせよ、永久に生かして置くのわ、國民說話の精神である。日本武尊わ白い鳥になられ、菅原道真わ、天に昇りて雷神となり、源義經は衣川で死なずに、蝦夷に渡つてアイヌの神となり、六七年以前のこと、西郷隆盛が露西亞から歸つて來るとの風説を、一時世間を騒がせた程であつた。ホドソン河の發見者ヘンリック、ホドソンわ、山中でリップを留め、獨逸の皇帝フリードリッヒわ、カール大王やオットー皇帝と同様、今に山の中に生きておる。瑞西聯邦の建設者わ、四林湖に沿お岩窟の中に眠つてれるし、コルンブルの近所の洞穴の中にわ、ホルガー・タンスケが、其従者と共に、今に一個のテーブルを圍んでれる、フェリシア、ジュノーを連れて、山の中に隠れて了つた、アーサー大王が、今に歸つて來るとわ、ブリトン人の信仰で、セルキア人わ、其國民的英雄クラルエキツチ、マルコが、再び還つて來て、國民を率ゆるのを待つてれる。黃帝わ龍に乗つて昇天し、傳説の天の星となつて、永久に輝いておる。伏羲の如き國民的人文英雄をば、通常の人間と同様に、永久に此世を去らせると云事わ、國民的感情に於て、到底忍び得らるる

説話である、此説話の傳播に、基利斯督教の傳播が、與つて大に力ある事わ、今更事新しく云までもない。此説話の最初の形式が、如何であつたか。夫わ今日から想像する事わ、到底不可能であるが、『創世紀』に見えてゐるところでわ、洪水の原因わ、人民の墮落であつて、此洪水を起したのわ、万有の創造主即ちエホバの神である。何故かと云へば猶太の舊記わ、此事に關して、次の如く記してゐるから。

人始加_二多於地_一、亦有_二生_レ女者_一、神子輩、見_二人_一之女爲_レ美、隨_二其所_一欲而娶_レ之、耶和華曰、我靈必不_レ因_二人有_レ過恒爭之爭_一、蓋其爲_二肉體_一、姑弛_二期一百二十年_一、當時有_二偉大夫在_レ世_一、其後神子輩、與_二人_一之女同_レ室、生子亦爲_二英雄即古有_二聲名_一之人、耶和華神見_二世人之惡貫盈_一、凡其心念之所_二圖惟_一者、恒惟作_レ惡、故耶和華悔_二已造_二人於地_一、而心憂_レ之、耶和華曰、我所_レ造之人、我將剪_二滅於地_一、自_二人及_二獸昆蟲飛鳥_一、蓋我悔_レ造_レ之矣、惟挪亞、獲_二恩於耶和華前_一、舉_レ世自壞_二於神前_一、強暴徧_二於地_一、神鑒_二觀下土_一、見_二其自壞_一、因_二在_レ地兆民盡壞_二其所_一行、神謂_二挪亞_一曰、

兆民之末期、近_二及我前_一矣、蓋強暴徧_二於地_一、我將_二併_二其地_一而滅_レ之、

七日後、洪水氾_二濫於地_一、適挪亞在世六百年二月十七日、是日大淵之源潰、天破_二其隙_一、雨注_二於地_一、四旬晝夜、水溢_二於地_一、歷_二一百五十日_一、

支那の洪水説話わ兎も角も、吾吾は其他の場合に寧ろ單一起原説を採用す可き者と信ずる。勿論此には、多少の反對論はある。此反對論は如何なる程度まで、吾吾の單一起原論を、破壊し得るものであるか、吾々わ先づ希臘の洪水説話を見て、夫から北歐日耳曼種族の、洪水説話に説き及ぼるれと思はれ、『オギギア洪水』わ、希臘洪水説話の最古の者である。其時は銅時代或は鐵時代で、其原因は矢張

り、人類の墮落であつた。『ドイカリオン洪水』説話によれば、洪水の起つた時、プロメトリスに教へられて、舟を作つて溺れなかつたのわ、其子のドイカリオンと、バンドーラの女ヒルラと、唯此二人であつた。九日間の漂流の後、舟はオツリス山、他の説に従へば、バルナスス山に漂着した。洪水の起つた原因と云い、其時代と云い、神に教へられて、舟に乗つたと云い、二人の外は悉く、溺死したと云い、舟が山に漂着したと云い、希臘説話と猶太説話との類似わ、一つ二つの點に止まらぬ。後の者が、前の者の源であるか、或わ二つ共、別に共同の源から出たのであるか。何れにしても、兩者の間の親縁的關係を想像するには、十分である。

北歐日耳曼神話に於ても、同様である。アル神の子神たちが、巨人イミルを殺したとき、其屍骸から血が流れて、巨人の全族其ために溺死した。獨りヘルゲルミルのみは、其妻と共に舟に乗つて、溺死を免かれた。此が後の巨人族の祖先である。其時代は矢張り、世界原始の時代であつて、而も其乗つた舟と云のが、通常の舟ではないので、フリツネルの説明によれば、木の幹を空虚にしたもので、搖籃にもなれば、渡し舟にもなる様な物であつた。ドイカリオンの乗つたのは『ラルナツクス』で、ノアの乗つたのが『アルカ』。至るところに、舟の形が通常でないと云のは、決して偶然の一致とわ思われない。北歐説話に於ても、洪水の原因は矢張り、イミルの後裔の墮落である。神が其罰として、イミルを殺して洪水を起したのである。但しイミルの死が、洪水の本となると云此一事は、他の説話には見ぬ様であるが、イミルの語源的説明と、『創世記』七の十一『此日大淵之源潰』*Rupit omnes fontes abyssi* の句を比較すれば、此一事もまた、容易に了解することが出来る。羅旬語の『アビスス』と日曼語の『イミル』と、或るところに於て、共に人格化してゐる事は、

此想像を愈たしかにするものである。既にアンドレーの如きも、其著『洪水説話』に於て、北歐洪水説話の特生を疑ふてゐる。誠に尤の説と、云わねばならぬ。

反對論者之に對して、印度の洪水説話や、亞米利加の洪水説話や、南太平洋の洪水説話を列擧して、世界的説話獨生説を主張するが、其議論が如何程まで、信用すべき價值をもつてゐるか、此が第二の問題である。此點に關しては、キリヤム、ギルの著『南太平洋の神話と詩歌』の序文中に、マクス、ミュラーが次の如く論じてゐる。

ポリネシア群島の或ところでは、大洪水が丁度四十日間續いた、と傳はつてゐる。此が疑もなく、第一に怪しむ可きである。此は恐らく、宣教の影響である。もしまた、宣教の影響でないとするれば、此一點に關して、猶太説話とポリネシア説話との一致は、純粹の偶然に過ぎないか。或は氣象學的觀察に基くと、解釋せねばならぬ。併しなから、南太平洋土人の氣象學的觀察に就てわ、吾々の今日まで、未だ何事をも發見してゐない。自分ゝ亞米利加説話から、同様の一致を引證するを好まぬ何故かと云はば西班牙的潤色の存在を信ずるからである。トルテック洪水説話と、十五キユビットの深さまで、山が水に浸されとの話もまた、偶然の一致の例となつてゐる。『チマルボボカ文書』によれば、神々天地の創造に、數日を費やし、第七日目に、塵と灰から人間を造つた。何故に人間の創造が、第七日目であるかと問はれたら、何故に第七日目であつたか、と問はれたら、同答である。必しも、七と云數に拘泥するにわ、及ばぬ事である。印度洪水説話と、猶太説話との間にも、また多くの類似がある。併し世界數個所の洪水説話を讀んだものゝ、決して此類似の爲に、驚く事があるまい。此兩説話の共同起原説を採用しても、一方本源説を採用しても、兩

者の差異の説明が矢張り少からぬ困難である。唯マヌに告げられた後、第七目目に洪水が始まつた、と云一事を、著しい類似であるが、併し、第七目目に始まつたと云事を、唯『バアガブタブラナ』にのみ、見えておるところから見れば、矢張り此類似も、偶然と見なければならぬ。此一事を、猶太説話から、或はモヘメッド説話から出て来ると云のは、最も有力の説である。併し、外に輸入すべき多くの重要な事を差し置いて、何故些細なこの一事のみ輸入せられたのであるが。夫が第一に、了解し難い事である。

マクス、ミュラーの此議論を、寧ろ單一起原説を排斥して、偶然一致説を主張して来る。併しながら、論者の意を、決して根本から、單一起原説を排斥するのでなく、比較説説學者がやゝもすると、極些細な一致を楯として、妄りに根據のない説を立て様とする、其弊に激昂して、斯様な論を立てたので、敵に對し味方に對して、細心慎重の態度を守れと勸むるのが、其議論の主意である事わ、マクス、ミュラー自身で、明白に述べて来る。要するに、洪水説話の單一起原説を、決して根據のない説でわない、と云事を、マクス、ミュラーも十分許して来る。唯單一起原説或は共同起原説、或は部分的輸入説などを、採用した時分にわ、兩者の差異の説明を、如何様にす可きか、と云のが、其懸念の要點であるので。併しながら、起原を同うするものわ、必しも末の末まで、一致せねばならぬと云事わないから、單一起原説或は傳播説を此點に關して少しも懸念す可き事わない。唯其根據は確かであらば夫で十分である。

吾々の所謂世界的洪水説話には、次に擧ぐる三個の特色がある。

一、發生の時代が、世界のはじめである事、

二、發生の原因は、人間の墮落である事、

三、特に擇ばれたる一家族の外は、悉く此洪水の爲に溺死する事、

翻つて、支那洪水説話を見るに、茲に擧ぐる特色の一つも、其中に見えぬ。支那の洪水も、固より上古の時代に屬するのではあるが、其以前にも随分永い人文の歴史があり、以後の人文は、矢張り前の人文を、相續けてゐる。人文發達の一時の阻碍は、勿論あつたに相違ないが、絶滅と更新の事は、吾々の支那説話には、更に見えぬのである。洪水の原因が、人間の墮落でもなければ、人類が悉く溺死した譯でもない。寧ろ偶然の天災であつて、大英雄が出て、此災害を人類の爲に治めたのである。神の告によつて、ノアが難を免かれたのと、天壤の相違である。従つて吾々の支那洪水説話は、所謂世界的洪水説話の、大圈内に屬するものではない。寧ろ、支那國民説話の、固有の財産である。自然發生説は、支那洪水説話の解釋である。

支那洪水説話が、所謂世界的洪水説話と、其特色に於て、少しも一致してゐるのは、自然發生説の一方の根據で、他の一方の根據は、支那國土の自然の地勢に求む可きである。西に蒙古、バミールの大高原を控へ、東は渤海に面し、廣袤數千里、大河の縱横に貫通する、支那の北鄙は、ナイル河畔の埃及、南亞米利加のアマゾン、オリノコの流域、歐羅巴でわライン河畔、セイヌ、ローダヌスの流域と等しく、古から洪水に罹り、極めて緣故の深い土地である。大洪水の爲めに、黄河が屢ば其河道を變えた事、歴史が明かに、吾々に告げてゐる。恐らば、太古堯舜の時代に於て、實際の大洪水が、黄河の流域に起つて、説話に見ゆる通りに、九年とわ續かなかつたにしても、可なり長い間續いて、空前の大慘狀を現出し、漸く大豪傑が出て、治水平土の大事業を遂げたので、國民

始めて、安堵の思をなした事があつた。此大洪水の慘狀が、空前絶後であつて、禹の事業がまた從て、立派であつたのね、殊に此洪水に限つて、永久に國民の記憶に留り、遂に今日吾々が持てゐる様な説話を生ずるに、至つたのである。支那説話の天然の分子ね、此説話に於て、明かに認むる事が出来る。

世界諸國の大河流域にわ、同じ様な傳説が、多く残つてゐる。古代學者が此點に關して、多くの興味ある材料を、供給し得るのである。この點から見れば、此も一種の世界的説話である。

其 四

支那寶劍説話

— but this was all of that true steel,

Where of they forged the brand Excalibur,

And lightnings played about it in the storm,

And all the little fowl were flurried at it,

And there were cries and dashing in the nest,

That sent him from his senses: —

Tennyson, "Gareth and Lynette."

英の大詩人テニスンが、其作『ガレス、エンド、リンネット』に於て、ガレスの語をかりて、神劍の徳を述べてゐる。神劍エキスガリバーは、もとアーサー大王の持つておつた神劍で、或神女が王に與

はたものである。エキスガリバトとは、日本流に云ふば鐵切である。鬚切、蝦蟇切などと、名稱の似ておるところ、既に甚だ面白い。命名の起原が、似てゐるばかりでなく、名劍其物が不可思議の德を具わてゐるのも、また甚一致してゐる。素盞鳴尊の得られた、天叢雲寶劍は、日本武尊を駿河の野に助け、平維茂は信州戸隠山で、劍の德によつて妖鬼を退治した。阿蘇神社の螢丸の寶劍は、多多良濱の合戦に、靈德を現はした。謡曲『小鍛冶』に、『支那にて漢王三尺の劍、天下を治め、煬帝がけいの劍、しうじつの光を奪ひ、玄宗帝の鐘馗大臣も、劍の德に、魂魄は君邊に仕へ奉り、魍魎鬼神恐れて害をなさず云云。』播磨風土記』に、

昔近江天皇之世、有_二丸部貝_一也、是仲川里人也、此人買_二取河内國兔寸村人之寶劍_一也、得_二劍以後、舉_二家滅亡_一、然後吾編部犬猪、圃_二彼地之墟_一、土中得_二此劍_一、與_二土相去廻一尺許、其柄朽失、而其刃不_レ澁、光如_二明鏡_一、於是犬猪即懷_二怪心_一、取_二劍歸_二家_一、仍招_二鍛人_一令_レ燒_二其刃_一、爾時此劍屈申如_レ蛇、鍛人大驚不_レ營而止、於是犬猪以_二爲異劍_一、獻_二之朝廷_一、後淨御原朝廷甲申年七月、遣_二曾禰連磨返_一送本處、于_レ今安_二置此里御宅_一、北山之邊、有_二季五根_一、至_二千仲冬_一、其實不_レ落、と見ゆるのも、一個の寶劍說話と、見なければならぬ。日耳曼神話に於ても、劍の名匠ミーメと云のが見ゆる。世界最良の寶劍わ、ミーメの手で出来てゐる。キーランドの寶劍わ其一つで、ミミンゲト名づけてある。ハーゲンの寶劍ダインスライフわ、一度抜けば、血を見ねば再び、鞘に納まらず、其疾わ如何なる藥も癒やす事が出来なかつた。其外此と似た様な寶劍の話わ幾等もあるが、大抵或一個の英雄談、或わ其他の說話中の、一節に過ぎないか、或わ劍に關する古代の信仰の一例として、觀察さるゝに過ぎない位の性質で、獨立に寶劍其物を主にしてゐる說話わ、外國に殆ど發見

することが出来ぬのである。此點に於てわ、日本わ大に誇る可きものを、もつてれる。『太平記』の發端に掲げてある、『劔の卷』の一篇、作者わ誰であるにしても、一個の實劔說話としてわ、随分複雑な、發達したものと云つて宜しい。併し、日本の實劔說話わ、支那實劔說話の寧ろ模倣であつて、本來の國民的產物とわ云われぬ。其標本わ、隣國の支那にあるのである。

支那實劔說話わ、最も嚴密な意味に於て、實劔說話と名づく可き、十分の構造と價值を具へてれる。其說話の根底に存じてれる思想、即劔の超自然力に關する信仰、武器としての劔の、不可思議力に關する信仰わ、殆ど世界的であつて、別に説明するまでもない。唯此信仰が其說話の發達の度が証明してれる通り、支那國民の間に於て、殊に著しく、發達しておる事わ、茲に注意して置かねばならぬ。周室衰へて、諸侯各地に割據するに至つて、支那の歴史わ、戰國時代となる。戰國時代わ、武力競争の時代である。劔わ即ち、武徳の表彰である。此時代に、實劔說話が發生し、發達したのわ、誠に偶然で無いのである。『拾遺記』『搜神記』『吳越春秋』などわ、此說話の重なる源である。此節に於てわ、吾吾わ比較もししくわ批評より、寧ろ紹介を吾吾の務として、本來の趣味を損せぬ様、原文のままに、二三の說話を掲げて置く。

干將吳人也、與歐冶子同師、俱能爲劔、越前來獻三枚、闔閭得而寶之、以故使劔匠作爲二枚、一曰干將、二曰莫耶、莫耶干將妻也、干將作劔、采五山之鐵精六合之金英、候天伺地、陰陽同光、百神臨觀、天氣下降、而金鐵之精不銷淪流、於是干將不知其由、莫耶曰、子以善爲劔聞於王、使子作劔、三月不成就、其有意乎、干將曰、吾不知其理也、莫耶曰、夫神物之化、須人而成、今夫人作劔、得無得其人前後成乎、干將曰、昔吾

師作冶金鐵之類不錯、夫妻俱入冶鑪中、然後成物至今、後世卽山作冶麻經蓼服、然後敢鑄金於山、今吾作劍、不變化者、其若斯耶、莫耶曰、師知燦身以成物、吾何難哉、於是干將妻乃斷髮剪爪、投於爐中、使童女童男三百人、鼓橐裝炭、金鐵刀濡、遂以成劍、陽曰干將、陰曰莫耶、陽作龜文、陰作漫理、

楚干將莫耶、爲楚王作劍、三年乃成、王怒欲殺之、劍有雌雄、其妻當產夫語曰、汝若生男、大告之曰、出戶望南山、松生石上、劍在其背、於是將雌劍往見楚王、王殺之、莫耶子名赤比、後壯問其母曰、吾父所在、母曰、汝父爲楚王作劍、三年乃成、王怒殺之、去時囑我語、汝子出戶南望、松生石上、劍在其背、子出戶南望、不見有山、但觀堂前松柱下石低之上、卽以斧破其背得劍、日夜欲報楚王、王夢見一見眉廣尺、言欲報讎、王購子千金、見亡去入山行歌、客有逢者謂、子年少何哭之悲耶、曰吾子將莫耶子也、客曰、聞王購子千金、子將頭與劍來、爲子報之、見曰幸甚、卽自刎立僵、客曰不負子也、於是屍乃仆、客持頭往見楚王、王大喜、客曰是乃勇士頭也、當於湯鑊煮之、三日三夜不爛、頭墜出湯中、瞋目大怒、王自往臨視之、客以劍捉王、王頭墮湯中、客亦自擬已頭、復墮湯中、三首俱爛、不可識別、乃分其湯肉葬之、故名三王墓、

越王勾踐使工人、以白馬白牛、祠昆吾之神、采金鑄之、以成八劍之精、一名攄日、以之指日、則光晝暗、金陰也、陰盛則陽滅、一名斷水、以之劃水、開卽不合、三名轉魄、以之指月、蟾兔爲之倒轉、四名懸剪、飛鳥遊過觸其刃、如斬截焉、五名驚魘、以之泛海、鯨鯢爲之深入、六名滅魂、挾之夜行、不逢魍魎、七名卻邪、有妖魅者、見之卽伏、八

名_二莫耶_一、以切_レ玉斷_レ金、如_レ削_レ土木_一矣、以應_二八方之氣_一、鑄_レ之也其山有_二獸_一、大如_二兔_一、毛色如_レ金、食_二土下之丹石_一、深穴_レ地以爲_レ窟、亦食_二銅鐵_一、胆腎皆如_レ鐵、其雌者色白如_レ銀、昔吳國武庫之中、兵刃鐵器、俱被_二食盡_一、而封署依然、王令_レ檢_二其庫_一、穴獵得_二雙兔_一、一白_一、黃_一、殺_レ之、開_二其腹_一、而有_二鐵胆腎_一、方知_二兵刃之鐵_一、爲_二兔所_レ食_一、王乃召_二其劍工_一、令_レ鑄_二其胆腎_一、以爲_二劍_一、一雌_一、雄_一、號_二千將_一者雄、號_二莫耶_一者雌、其劍可_二以切_レ玉斷_レ犀_一、王深寶_レ之、遂霸_二其國_一、最後に、等しく同じ圈内に屬するも、問問哲學的の考察を加へて、寶劍說話の中でも、最も規模の大なるものの一を擧げて、此節の結尾として置く。他民族の同種の說話との比較研究を、姑く他日に譲つて、唯一片の資料として、掲ぐるのである。

昔者越王句踐、有_二寶劍五_一、聞_二於天下_一、客有_二能相_レ劍者_一、名_二薛燭_一、王召而問_レ之曰、吾有_二寶劍五_一、請以_レ示_レ之、薛燭對曰、愚理不_レ足_二以言_一、大王請不_レ得_レ已乃召_二掌者_一、王使_レ取_二毫曹_一、薛燭對曰、毫曹非_二寶劍_一也、夫寶劍五色並見、莫能相勝、毫曹已檀名矣、非_二寶劍_一也、王曰取_二巨闕_一、薛燭曰、非_二寶劍_一也、寶劍者、金錫和銅而不離、今巨闕已離矣、非_二寶劍_一也、王曰然巨闕初成之時、吾坐於_二露檀之上_一、宮人有_二四駕白鹿而過者_一、車奔鹿驚、吾引_二劍而指_レ之、四駕上飛揚不_レ知_二其絕_一也、穿_二銅釜_一、絕_二鐵鏃_一、胥中決如_二黍米_一、故曰_二巨闕_一、王取_二純鉤_一、薛燭聞_レ之如_レ敗、有頃懼如_レ悟、下_二階而深惟_一、簡_二衣而坐望_レ之、揚_二其華_一、捧如_二芙蓉出_一、觀_二其鉞_一、鏘如_二列星之行_一、觀_二其光_一、渾渾如_二水之溢_一於塘、觀_二其斷_一、巖巖如_二鎖玉_一、觀_二其才_一、煥煥如_二冰釋_一、此所謂純鉤耶、王曰是也、客有_二直_一之者、有市之鄉_二、駿馬千疋、千戶之都_二乎_一、薛燭對曰、不可_レ當造_二是劍_一之時、赤董之山、破而出_レ錫、若耶之溪、涸而出_レ銅、雨師掃灑、雷公擊橐、蛟龍

捧鱸、天帝裝炭、太一下觀、天精下之、歐冶乃因天之精神、悉其伎巧、造爲大刑三小刑
 二、一曰湛盧、二曰純鉤、三曰勝邪、四曰魚腸、五曰巨闕、吳王闔廬之時、得其勝邪魚
 腸湛盧、闔廬無道、子女死、殺生以送之、湛盧之劍、去之如水、行秦過楚、楚王臥而寤、
 得吳王闔廬之劍、將首魁漂而存焉、秦王聞而求不得、與師擊楚、曰、與我湛盧之劍、
 還師去汝、楚王不與、時闔廬又以魚腸之劍、刺吳王僚、此其小試於敵邦、未見其大用
 於天下也、今赤堇之山已合、若耶溪深而不測、群神不下、歐冶子即死、雖復傾城量金珠
 玉竭河、猶不得此一物、有市之鄉、駿馬千疋、千戶之都、何足言哉、楚王召風胡子
 而問之曰、寡人聞、吳有干將、越有歐冶子、此二子甲世而生天下、未嘗有一精誠上通天下
 爲烈士、寡人願齎邦之重寶、皆以奉子、因吳王、請此二人、作鐵劍、可乎、風胡子曰
 善、於是乃令風胡子之吳、見歐冶子干將、使人作鐵劍、歐冶子干將、鑿茨山洩其
 溪、取鐵英、作爲鐵劍三枚、一曰龍淵、二曰泰阿、三曰工布、畢成、風胡子奏之楚王、楚
 大王見此三劍之精神、大說、召風胡子問之曰、此三劍何物所象、其名爲何、風胡子對曰、
 一曰龍淵、二曰泰阿、三曰工布、楚王曰、何爲龍淵泰阿工布、風胡子對曰、欲知龍淵、
 觀其狀、如登高山、臨深淵、欲知泰阿、觀其鉞、巍巍翼翼、如流水之波、欲知工布、
 鉞從文起、至脊而止、如珠不可衽、文若流水不絕、晉鄭王聞而求之不得、與師圍楚
 之城、三年不解、倉穀粟索、庫無兵革、左右群臣賢士莫能禁止、於是楚王聞之、引泰阿
 之劍、登城而麾之、三軍破敗、士卒迷惑、流血千里、猛獸歐瞻、江水折揚、晉鄭之頭畢白、
 楚王於是大說曰、此劍威耶、寡人力耶、風胡子對曰、劍之威也、因大王之神、楚王曰、夫鐵

耳、固能有精神、若此乎、風胡子對曰、時各有使然、軒轅神農赫胥之時、以石爲兵、斷樹爲宮室、死而龍藏、夫神聖主使然、至黃帝之時、以玉爲兵、以伐樹木爲宮室、鑿地、夫玉亦神物也、又遇聖主使然、死而龍藏、禹穴之時、以銅爲兵、以鑿伊闕、通龍門、決江導河、車注於東海、天下通平治爲宮室、豈非聖主之力、當此之時、作鐵兵、感服三軍、天下聞之、莫敢不服、此亦鐵兵之神、大王有聖德、王曰、寡人聞命矣、

故英國女皇ヴィクトリア陛下の偉業と

パルマーストーン卿の外交（前承）

教授 長谷川貞一郎

第五 女皇と卿の不和

卿の磊落淡泊の氣質と、凜然たる勇氣と、極めて厚き自信力とが、歐州諸國多數の政治家間に敵を作れるは前に述べたる如し、而して卿は又た此が爲め、女皇并に皇配の爲めに嫌忌せられたり。

卿は大事を奏上するに當り、女皇の事を解するに苦むを意とせず、常に平然として居り、又た事に就き女皇の裁可を煩はすに當り、女皇の之を否む能はざるを豫知し、恬焉として必ず其言を待てるが如き態度を示せり。又た卿は屢女皇に奏上せず、臨機應變訓令を傳達せり。此れ即ち一には女皇の頼りて以て、政を視給へる皇配アルベルト親王が、叔父白耳義王及び王の寵臣ストクマール男より其意を承け、國務に容喙すべきを憂ひたると、一には皇配の人と爲り端正にして律直、沈着にして細心、事を視る丁寧反覆再思三考の後、漸く意を決するの風ありて、卿と其性相容れざるを以